ソフィア
京都新聞文化会議

ブータン汗かき往診の日々

坂本　龍太氏

826

汗が噴き出る季節に思い出すのがブータンのでっぷり太ったキュウリである。日本では早いうちに収穫することが多く、「太ったキュウリは育ち過ぎ」とも言われるが、ブータンではこれが一般的である。

12年ほど前、ブータン東部のタシガン県カリンの診療所を拠点に、往診のため村々を回っていた。当時、この地域で自動車が通れる道はごく限られていた。歩いて山を越え、谷を越えての小旅行であった。

標高が2300㍍ほどもあったので低地に比して酸素が薄く、紫外線も強く、慣れないうちは、疲労を伴う行程だった。そんな旅人を気遣うように、山道にはチョルテンという仏塔が点在する。

さかもと・りょうた　1976年生まれ。フィールド医学、公衆衛生学。国立国際医療センター救急部、地球研研究員、京都大白眉センターなどを経て現職。著書に『ブータンの小さな診療所』。

旅人たちはその周りを時計回りに歩いてお参りをし、台座に座る。嗜好品のドマ（キンマの葉、石灰、檳榔樹の実の3点セット）を噛み、口を真っ赤にして一息つく。「おまえさんはどこに行くのさ？」「レミのおばあさんの所だよ」「気をつけてな」「またね」とやりとりする。

村へ着き、往診を終えると、そこに待ち構えているのが酒瓶を持参する方々である。トウモロコシから作った自家製の焼酎を注いでくれるのだ。「要らない、要らない」と断っても、許してはくれない。ツォクチャンという客人にお酒を振る舞う慣習である。

復路では、バター茶や落花生を振る舞われ、木に実る渋い梨を食べて顔をひん曲げたりしながら、また谷を越え、山を越えて診療所に帰っていく。大汗をかきながら山道を歩き喉はカラカラ、いよいよしんどくなってきた時、往診に同行してくれた白髪交じりのケサンさんが、リュックの中を探り、さりげなく差し出してくれたのが水分をたっぷり含んだあのキュウリである。キュウリのおかげで何とか日暮れ前に診療所に戻ることができた。

あれから時が過ぎ、カリンにも自動車が通れる道が整備され、あの山道はあまり使われることのない古道となった。お酒をこよなく愛したケサンさんは、数年前に病気で亡くなられた。隣国インドでのコロナ感染拡大で心配されたブータンは、マスク、手洗い、隔離、ワクチン、検査を徹底してきた。ワクチンが普及してきたこともあって、最近では水際対策も緩和されてきている。コロナ禍の影響でここ数年行けていなかったブータンに、そろそろ行くことができそうである。

今日の夕食は、久しぶりにビールでも飲みながらブータンを思い出して冷やしたキュウリを縦半割りし、肉味噌をちょこっと載せて、スダチでも搾って食べたいものである。

（京都大学東南アジア地域研究研究所准教授）

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます